

渡辺潤ゼミ解体試論

——感謝の言葉の代替としてのゼミ研究指導紹介——

三 浦 倫 正

東京経済大学に大学院コミュニケーション学研究科が新設されるにあたって招聘された渡辺潤教授との出会いは1999年4月です。私は大学院の第1期生として入学し、博士後期課程単位修得満期退学後も10年以上に渡ってゼミの卒業生と共に院生対象の「研究指導」という授業に参加させていただきました。最も長い期間において先生にお世話になった代表として、この場を借りて感謝の意味を込めて渡辺ゼミを紹介したいと思います。

〈社会学する渡辺ゼミ〉

さて、渡辺潤先生のホームページ (<http://www.tku.ac.jp/~juwat/>) のプロフィールには、以下のようなことが書かれています。

好きなことをそのまま研究テーマにして20年以上も押し通してきた。

「そんなことが研究テーマになるんですか？」

「してるんです。」

「はあー……へえー……ほおー」

「どうしました？ 変ですか？」

こんな反応が今でもときどき返ってくる。社会学に扱えないテーマなどないし、仕事と遊びや趣味を切り離して考える必要も、本当はどこにもないはずなのに。

このような研究姿勢に憧れ、「好きなことをテーマ」に研究指導を受けたい学生が先生を慕い、集った場所、それが渡辺潤研究室だったと思います。

大学院で先生の研究指導を受けた学生は多彩であり年齢も幅広いものです。それは学部を卒業して大学院に進学した22歳の若者から団塊の世代にまで多岐に渡ります。それらの構成メンバーは現役の大学教授、高校教諭、ミュージシャン、ファッショントレンド調査者、元お笑い芸人、新聞記者、元大手企業戦士、看護学校教員、留学生など、異なるバックボーンを持つ院生や研究者たちでした。

個性的なメンバーが取り組んだ研究は実に多彩です。例えば、そのテーマは英語教育、電話、台湾映画、シンガポールにおける日本語コミュニティ誌、マンガの表現構造、ゲームセ

ンターに集う若者たち、クイズ番組と視聴者、ライブハウス、音楽フェス、踊り場の変遷、ファッション、キャラ、笑い、アイドル論、韓国における日本の大衆文化、中日道德教育の比較、在中日系企業の社内コミュニケーションの変遷、コンパ、テレビ番組「相棒」。さらに他のゼミ生もサブゼミとして研究指導に参加し、ヴァンパイアの間人化、ファンタジーとしての陰陽師、あるいは日本の洋裁文化など、先生の指導を受けたことによって読み応えのある、深みが増した作品を完成させていました。

〈「コーヒーハウス」のような研究室〉

論文作成を目的とした学部4年生のゼミと大学院の「個別研究指導」は、渡辺先生の研究室で行われました。研究室が利用された理由は、そこに常備された大量の専門書や映像の活用にあります。おかげさまで我々は社会学、文化社会学やコミュニケーション学に関連する研究書や専門書などの有用な資料を何冊でもすぐに借用でき、それらを論文内容に反映することもできました。

入れたてのコーヒーの良い香りのする研究室には常に先生お気に入りのロック・ミュージックが流され、お菓子が誰からも手の届く場所に積まれていました。そのような心遣いにより、その場はくつろぎやすいサロンのような雰囲気を醸し出しているのです。我々は緊張もなく毎回自由闊達な議論を行うことができました。

かつて、18世紀のロンドンには新聞を読める「コーヒーハウス」が2000軒以上もあったと言われていました。そこでは新聞や雑誌が複数の人たちによって読まれ、世間話がされ、そこが近代市民社会を支える世論を形成する重要な空間となったことは周知の事実です。まさに渡辺研究室での研究指導は研究テーマが異なる院生や卒業生による発表に関して活発な議論が交わされる「コーヒーハウス」のような場でした。そこでは5限(16:20)から始まる研究指導が21時過ぎまでに及ぶことも決してめずらしいことではありませんでした。議論において交わされるゼミ生、そして先生からの鋭い指摘は、発表者のその後の学会発表や論文作成にたいへん役立ったということは言うまでもないのです。

〈すべてはJUWAT先生から教えて頂いた〉

先生の退職とともに「研究指導」は残念ながら無くなりましたが、私たちはその場で頻繁に耳にした先生の一言が忘れられません。それは「何を発表しますか、いつ発表しますか」という積極的な発表を促す問いかけです。そのおかげでゼミ生たちは継続的な研究習慣を身につけることができ学会発表、投稿論文、修士論文、博士論文、単著等の成果物を仕上げることができました。そのような中、私は往復の勤務時間、早朝や夜間から何とか研究時間を捻出し、現役教員として高校という場をフィールドワークと捉えることで、仕事の場で感じる日本人にとっての英語教育という問題や生徒たちとのつきあいの中で抱く想いから発する

渡辺潤ゼミ解体試論

問題などを中心に、研究活動を継続してきました。

研究室に集うメンバーたちは渡辺先生監修のもとに分担執筆し、何冊かの書籍を出版しています。私も他のメンバーと同様に執筆を分担いたしました。具体的には『コミュニケーション・スタディーズ』では「異文化コミュニケーション」、「ステレオタイプ」、「病と死」、『カルチュラル・スタディーズを学ぶ人のために』では「日本の出版事情」、『文化系大学生のためのレポート・卒論術』では「コミュニティ」と「アイドル」、『レジャー・スタディーズ』では「仕事」です。その分担内容は多岐にわたるものでしたが、それらについての専門書を何冊も読み込む事で、より深く学びながら発表と討議を繰り返し、完成にたどり着くことができました。このような分担執筆の機会を渡辺先生からいただいたことに本当に感謝しております。

これからも先生の指導を受けた私たちは惑わされることなく研究活動を継続し、自分の世界を開拓しながらアイデンティティの確立と確認を行っていくに違いありません。仕事に没頭して便利な暮らしに安住することなく、憧れの先生に倣い不便な生活であってもそれらを楽しみながら日々充実した人生をおくれるようなライフスタイルを模索していきたいと思います。

渡辺先生、いつまでもお元気でいてください。

「コーヒーをもう一杯」いただきに河口湖へお邪魔します。

それでは。